飛鳥寺周辺の調査

（A・B調査地　昭和55年12月）

飛鳥寺周辺では寺域推定地の東方と西方の２カ所で発掘調査を実施した。

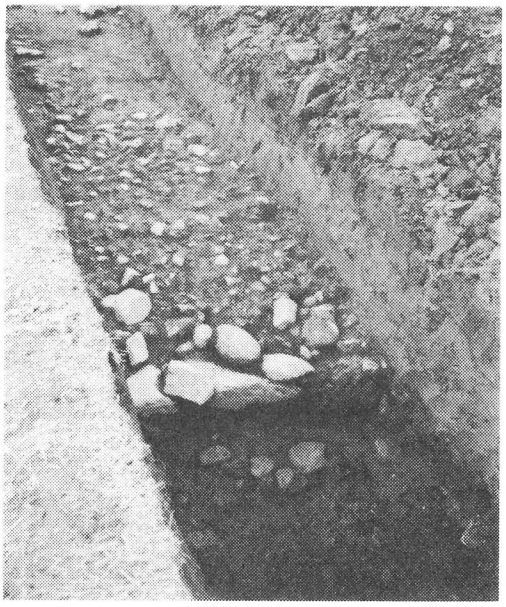
A調査地　調査地は飛鳥坐神社の南西方約80ｍの水田で，飛鳥寺寺域推定地の東接地にあたる。水田は，南東から北西へのびる二つの丘陵で形成された谷筋の開口部に立地しており，そこに南北２ｍ，東西８ｍの調査区を設定した。

調査区の層序は，耕土，床土，黄灰色粘質土，灰褐色粘質土，青灰色粘土，暗灰色粘土，暗灰色砂となる。遺構は灰褐色粘質土層の上面から掘込まれた素掘りの井戸のみであるが，青灰色粘土・暗灰色粘土層にも飛鳥寺の丸・平瓦片が含まれていた。井戸の一部は調査区外に拡がる。平面形は長径1.3ｍ以上の

調査地位置図（1：4000）

楕円形で，深さは1.2ｍある。出土した須恵器や飛鳥寺軒丸瓦XIVA型式からみて，この井戸は奈良時代後半には埋められたと考えられる。

Ｂ調査地　調査地は，飛鳥寺の西面築地推定地から西へ約40ｍの位置にある。二枚の水田に東・西の二区を設けて調査を実施した。東区は南北1.3ｍ，東西15ｍ，西区は南北1.6ｍ，東西28ｍである。なお，西区には顕著な遺構が認められなかったので，ここでは東区の遺構についてのべる。



Ｂ調査地　石列（北西から）

東区の層序は上から耕土，床土，黄色粘土，黒茶褐色粘質土，暗茶褐色粘質土となり，地表下0.5～1ｍにある暗茶褐色粘質土層の上面で礫敷を検出した。礫敷は東区全面にわたって，拳大の礫や丸・平瓦を敷きならしたものであるが，上面は平坦でなく，二段に作られ，東半部が西半部よりも20㎝高くなる。さらに，東半部，すなわち上段部の西縁には40～50㎝大の自然石の西面を揃えて並べた南北方向の石列がある。石列の石は，暗茶褐色粘質土層上面から掘り込まれた掘形の底に礫を敷いた後に据えられている。礫敷の下面となる暗茶褐色粘質土は，東区の東西端では40㎝の比高差があり，西へ向って緩く傾斜している。この点から考えると，石列は，段を設けて礫敷面を水平に作るための施設と考えられる。また，石列西面の一点を国土方眼座標で示すと，

Ｘ＝－169,051.000ｍ

Ｙ＝－016,386.200ｍ　となる。

今回の調査地は狭小な範囲に限られたため，礫敷の年代や性格について論じるまでには至らない。しかし，飛鳥寺西方地域では，これまでに玉石組みの溝や石敷が明らかにされており（奈良県立橿原考古学研究所編『飛鳥京跡』二 第11・18次調査），それらの遺構との関連が考えられよう。